

いのち
生命の泉

しぶや
りふかふ

ぼんこつパソコンのスイッチをオンにする。システムが起動するまで待った。PINコードの入力画面が出る。PINコードを入力すると、次に顔認証の画面が出た。自分の顔が映っている。認証が終了し、ログインが完了した。

五年前、ちょうど僕が入社した頃から、これが自動的に記録され、タイムカートの役割を兼ねるようになっていた。

席を立ち、給湯室に入って、誰かが社に寄附したイタリア製コーヒー・メーカーで淹れた。香りが一秒だけ現実を忘れさせる。コンマ二秒かもしれない。マグカップには古代ギリシアの黒絵式陶器のアキレウスの図柄を模した色絵が釉薬を掛けた本焼の上に絵付されている。

暫時、湯気を見ていた。ここはせわしくなく、静かだ。何となく、氣力がなかった。最近、仕事を辞めることをよく考える。

なぜだろう。よくわからない。たぶん、すべてが虚飾だから。って、何となく昔の映画の芝居があった科白みたいだ。などと勝手な思い込みで一部の昔の映画を揶揄しつつ、軽くジャブのように自己否定するこれって、たぶん、¹或

る種のナルシスムなんだろうななどとも思ってもみた。

でも、自分の動機の不純さに拘らず、社会すべてが虚飾であることは事実として間違いない。

虚飾。人類が弱肉強食の世界を生き残るために社会的な生き物であることを選択した瞬間から、離れられなくなったリスクだった。社会的であるためには、人間の奥底に潜む剥き出しの自然を、細胞の一つ一つに隠蔽された野獣を抑制しなければならない。

たとえば、或る会社が「お客様の笑顔のために」と言っただって、それは金儲けの手段に過ぎず、購買者の方でもそれを理解している。真に受けている人間なんて、いるはずもない。調査したわけではないけど。

パソコンから我が社のシステムに入る際の、この認証だって、「セキュリティを重んじてますよ」アピールと、何かあった時に「いや、日ごろから対策は講じていました」と言い訳できるようにしておくという、パフオーマンズ的要求がある。すべてはアリバイ作りだった。嘘だらけの世の中の一端が、ここに

も明瞭に露呈している。

けど、それが辞めたい理由のすべてではなかった。そんな正義漢ではない。靄のような不安のせいだろうか。違うと思う。少なくとも、思っていた。

まあ、わからないなら、放置しておこう。それしかなかった。

という、いつもの愚痴を儀礼的、かつ空転的に終え、そして、仕切り直すかのように、いつもどおりに呟く、

「さあ、ぼやいても、変化なし、進捗なし。……さて、と」

というルーチンな科白の後のルーチンな作業に入った。電子入札システムに入り、どんな公告が出ているかを確認する。

この時期は毎日、十時と十四時に必ずこの閲覧していた。時間が決まっているわけではない。何となく、そのくらいの時間帯に出ていることが多いような気がしていただけであった。

システムに入るための認証に一秒ほどを要す。スマートホンの顔認証に比べると、まったく遅い。スマートホンは認証しているかどうかわからないくら

い速いが、我が社がリリースするパソコンではこのザマであった。

安く契約したせいであろう。個人持ちスマートホンの方が上等という情けない結果である。

溜息をするが、それは社のパソコンのせいばかりではなかった。

「何もないな。清掃業務委託、警備業務委託、電話交換機保守点検業務委託か。年度初めの定例だが、うちには関係ないや」

附箋に記した自分のメモに従い、次の作業に入った。

一昨日の入札に応札したのであったが、その後の結果通知書が入札システムに入っているはずなので、パソコンで確認する。今回も取れていなかった。

「一応、入札結果の開示も確認しておこう」

入札結果の項目が一齐に出てくる。探すのに一苦労した。情報の開示と説明責任、これらは必ずついて来る。他人事ながらも、またも溜息が出た。

パソコンに貼ってあったもう一つの附箋のメモに眼が留まる。〃官公庁のホームページを開き、経済産業省からの新たな通達がないかを確認せよ4:

…か。した。ない。

社内の電子メールボックスを開く。先程とは、別のパスワードを入れた。自分宛てに来るメールの受信状況を見る（むろん、自分のしか見られない）。

二、三十件あった。

総務課から廻って来た電子文書には碌なものがない。国税庁からの照会や、国土交通省のアンケート、大学からの調査研究への協力依頼、地域イベントへの参加依頼、代表取締役変更のお知らせ、であった。ちつ、何でも“転送”で丸投げしてくんじゃねーよ、とか思いつつ、受信する。仕方ない、仕事だ。組織で働くということの、一面でもある。

「あ、何だ、こりゃあ、契約保証金に関する法令の確認メモ……何で、僕なんだ？ 経理に訊いてくれよ」

何の生産性もない仕事で、少なくとも、一時間以上は喪われた。グループ内の定例の打ち合わせで、小会議室に行く。

「大丈夫、大丈夫」

資料は土曜日、日曜日に作ってあった。余裕だなと思っていたが、さらっと見直して、確認していない部分があることがわかる。

「またか」

いつものことであつた。寸前になると気がつく。焦るけれども、その場で説明するしかないとききらめるのもいつも。

十一時、実用的な必要性もあり、かつ気分転換にもなるので、

「齋鐵工務店に見積書を持って行きます」

課長に声を掛けた。今西課長は顔も上げないし、返事すらもしない。その方が気楽であつた。前の課長は一々お疲れ様とか言つて面倒臭かつた。

どうせ昼時が近いから出て行くんだろうな、くらいにしかな思っていないだろう。まあ、そのとおりだが、悪いことではない。毎晩、遅くまで仕事しているんだから、そのくらいしないと、参つてしまう。

今時、見積の提出はメールで可のところも多いが、大事な取引先には礼儀を尽くしていた。大手法人の方がさっぱりと電子データで済むことが多い。小さいところならファックスでOK。代々続く中堅どころの会社が持参を歡ぶ。角2の封筒を出した。昔は、皮革製ブリーフケースに入れて、恭しく出したものさ、とバブル景気の時代を経験したことのある前任の上司が言ったことがあった。今は社名入り封筒で十分だ、と独り勝手に思っている。経験上の感覚で判断しているだけで、実証や統計はしてなかった。

ちなみに、官公庁は代表取締役の丸い印を押した紙ベースの見積書を必須とする。社判のみはNG。

見積は契約の申し込み、請求書は債務の履行を請求することだから、いずれも法人の代表者でなければならない、ということか。これも確認したことはない。人事異動で、今年の四月に、このセクションに来て、仕事の引き継ぎをした時に言われたから、そうしている。確認の暇がなかったということもあるが、まあ、いずれペーパーレスへと移行していくだろうという思いがあった。

僕は企画2課の出入り口にあるカウンターで立ち止まる。社用車の使用記録簿に走り書きした。これもいつかペーパーレスに変わってくれるんだろうな。

エントランスを抜けて外に出ると、桜華の吹雪だった。風が強い。いつの間にか満開になっていて、もう散っているんだな、と思った。いつものことだが、桜を楽しむ余裕はない、桜を見れば、むしろ、憂鬱になった。年度初めは、いつも忙しい。年度末も。しかも、人事異動まである。

いつかは見てみたいと思う吉野の桜も、見られるようになるのは、定年退職以降だな、などと思う。何十年先の話だろう。定年が伸びないことを祈る。今はそういうふうにしか考えられなかった。

しかし、その時に至ったら、定年が伸びることを祈念しているだろう。年金が支給されるまでは給与がないと困ると思うから。でも、政府は簡単に約束を覆す。もっともらしい理由をつけて、支給金額は下がり、支給開始は先延ばし。いずれ七十歳支給か。などという不安を誰もがぼんやりと持っている。今の約

束など、何の当てにもならない。確かさなんて、どこにもない。

何となく、そんなふうに駐車場で無然と立ち、考えていた。ちなみに、無然とはがっかりしているさまであって、ぶすつとした表情ではない。これを最近、知った。こういう勘違いをしている人は僕以外にも少なからずいる。その言葉の持つ語感が僕らの感覚では、そういうふうに感受されるからであった。言葉って、結構変わっていくし、勝手に変えられてしまうもので、まったく当てにならない。

社用の軽自動車は駐車場の隅に独りで、ぼつんと居た。キーを差し込む。白くて丸っこいボディを振るわせた。会社のロゴと連絡先は塗装のように見えるが、実は大きなシールだ。それが我が社らしくてよかった。

街は空襲に遭わなかったせいで、昔ながらの狭い道が残り、渋滞が多い。路が広くて真っ直ぐならば、起こらなくてよい渋滞だった。僕らは遭わなくてもよい不幸に遭遇しているとも言える。

得体の知れない雑居ビルが多かった。古い建物が目立つ。長く続く不景気で、

設備投資にはまったく手が回っていない感じだ。このままでどうなるのか。日本は本当に経済大国なのか。こんなに働いて、やつとのこととどうにか維持している経済大国じゃないのか。だとすれば、他の先進国が同じくらい働いたら、簡単に抜かれるのではないか、そんなふうにも考え、未来の生活に漠然たる不安を覚える。経済という魔法の言葉で成り立つ幻影という感じがして堪らなかった。

中小企業はそんな大洋の中を、どうにか涉っている一枚の木の葉だ。僕は二階建ての鉄筋コンクリートを見上げながら、そう思った。

齋鐵工務店は齋藤鐵也初代社長が終戦直後に立ち上げた会社で、現在の代表取締役兼社長は鐵也氏の孫、丈夫氏、六十歳だ。社屋の前の、小さな狭い（三台くらいしか停まらない）駐車場に停めた。軽じゃないと、この駐車場は駐車し難いだろう。

丈夫氏の次男である総務課長に書類を渡すと、奥の社長室から声が。

「天平くん、寄って行きたまえ」

それが僕の名だ。天平 薨。

「失礼します」

社長の部屋に入ると、黒い大きな木製の両袖机があり、そこに悠々と坐っていた。その背後にあるタペストリーに、無意識に視線がいく。骨董や古美術の好きな社長は洋の東西を問わずに、部屋中に飾っているが、僕の眼は社長の背後に吊るされているそれにだけいつもいくのであった。

だが、興味の中心はタペストリーに描かれた絵の主たる題材ではない。どちらかと言うと、背景の一部とも言える部分だった。

女か男かもわからない複数の人物が泳いでいる。そんな図だった。ある日、社長が僕に教えたのである。

「洋の東西を問わず、古い絵には、暗喩というものがあってな、たとえば、これ。これは貴族の結婚式だが、この毛の長い犬は女性を暗喩し、鷹狩の鷹は男性を暗喩しているんだよ。そして、この草原のプールみたいなものは、『生命の泉』を暗喩しているんだ」

「『生命の泉』って、何ですか」

名称から推察はできるが、推察は推察でしかない。問い質す、というほどでもないが、問い質したい性分であった。そういう性質って、殆ど体質的なもので、僕のコントロール外に在ると思っている。アドレナリンなど神経伝達物質の分泌や、胆汁の分泌などと因果関係がある、みたいに。

そう考えれば、身体は自分であって、自分ではなかった。いや、恐らく正確に言えば、自分以上に自分であり、自分などと称するものは大海の上の一枚の木の葉で、生理的、化学的な現象が大海である。そう思いたい性格なのであった、僕は。

『『生命の泉』は『生命の泉』さ。泉だから生命力が滾々と湧くのさ。素晴らしいじゃないか。我が社に飾るのは、まあ、縁起物と言うか、祈願を込めているんだよ」

どうも怪しい解釈だが、お金を払った本人が満足しているのだから、まあ、良いのであろう。しかし、社長は趣味にお金を注ぎ過ぎているような気がして

いた。そんな人はたくさんいる。それなのに、僕は日頃から、漠然とした、曖昧な不安を感じていた。

帰社のため、駐車場へと降りた時、森本という昔から知り合い（僕は小学生の頃、一時、転学していた時期があつて、当時の友だちだった）で、銀行の融資担当をしている男と擦れ違った。

森本は振り返り、

「ところで、天平くん」

「ん、呼んだ？」

「そうです、天平くん、突然に声を掛けてすみません。どうですか、最近、齋藤社長さんとおつき合ひしてますか」

彼は接待のことを訊いているのか？ “つき合ひ” とは、夜のつき合ひのことか。よくわからないままに、確認するのも莫迦らしいので、適当に応える。

「いや、近頃はないけど。何か？」

「そうですか。いや、結構です」

社長などの人種が夜の巷に金を注ぎ込むのは、よくある話だ。だいたい、金と時間があれば、人はそういうものに走り易い傾向があるように思う。融資担当として、森本はそれを心配しているのだらう。あの社長にその傾向はなさそうだが、有り得なくはない。溺れるようなタイプには（少なくとも、僕からは）見えないが、色恋とはわからないものだから。

いや、もしかしたら、あの社長も気の利いて気遣いのある、闊達な人なので、そっちの方の甲斐性もあつて、人生経験の不足している僕が知らぬだけで、「実は豪快に遊んでいました」なんてこともない訳ではないのかもしれない。考えたこともなかった。

そのところを、判然とさせることができるほどの間柄でもない。

だが、どちらかと言えば、夜の巷よりも、骨董や古美術の類に浪費しているんじゃないかなと思っていた。

むしろ、森本の方が分不相応にクラブの女の子に入れ込んでいるじゃないか、僕はそれを知っていた。しかも、彼が通い詰めている店に、森本は齋藤社

長と何度か行っているのだ。

「或いは、嫉妬かな。まあ、要らぬ詮索か」

人の営為・理念・職業倫理、何もかもかたちだけさ、外面だ、上っ面で、すべてが傀儡、偽りだ、真情はない。

融資担当の心配と見せ掛けて、実はお店のこと、女の子の様子、などなど何でもよいから関連情報を探っているのでは、という僕なりの見立てであった。欲望を満たすために、そんなことをするなんて、あゝ、何て虚しい行為だ、
と思いはエスカレーションする。

だが、虚しい行為などと勝手に決めつけて、非難がましく思うことも、同じくらい虚しいものであった。

僕に何の関係もないし、証明もできないし、するつもりもない。

それでも、何となくさまざまに考えていた。ルーチンに考えながらも、心は虚しかった。同じ虚しさでも、屋根瓦の上で死んだ蜂の乾いた空っぽな亡骸を見て寂しくもどことなく清々しいような気分になるような虚しさが羨ましい。

妻も子もなく、会社もまあまあ順調な人間の贅沢な悩みだな、などと自嘲する虚しさもあった。

そういうことであれば、まあ、春らしい憂鬱と言えなくもないか。

齋鐵さんの不渡りの話が耳に入った。その情報は、直ちに全金融機関へと伝わったであろう。普通、そうなる。一切の融資が受けられなくなるはずであった。それから数日後、いや、一週間後だったか、二度目が出た。銀行取引停止の処分が下される。

「やはり、だめだったか」

僕らの日常は儚く、生活は脆弱なものだ。少しのバランスが崩れば、何もかもがドミノ倒しのように崩れていく。

心配から、というよりは、ただ、行くべきじゃないという思いから、逆に足が向いていた。平静な顔を作る。

「ご無沙汰しておりました、社長」

「あゝ、天平くんか、何だね」

思ったよりさっぱりした感じだった。しかし、倒産は動かせない事実である。僕は何かを仕切り直すために、一度だけ、所作せずに息を呑み込んだ。

「いや、寄っただけなのですが」

「そうかね、聞いただろ」

僕は言葉に詰まった。この時点では、未だやたらに、ええ、そうなんです、聞きました、と言つては話の出処に迷惑をかける段階だ。そんな打算からだつた。

「いや、ただ、それらしい話を」

「うむ、実は、そうなんだ。いろいろ世話になったね」

「いえ」

僕は今このタイミングで、『生命の泉』を見てはいけなないと思ひながらも、見ていた。いや、こんな時だから見ずにはいらなかったのかもしれない。

「あゝ、これか。こんなものに費やすんじゃないかった」

「社長、そんなことを」

言わないでください、と言葉に出掛かったのだが、やめた。

骨董や古美術などへ、余計にお金をかけては駄目なはずだ、家族のことを思えば。家族の悲惨を想えば。

だが、本当は、そうじゃない。『生命の泉』は正しい。だけど、普通の人には実際の悲惨に遭うと、家族の悲しみを見ると、たちまち、現実を実感して、後悔する。それが正しい。だけど、それでも、『生命の泉』は正しい。そういう確信が瀝青のように胸郭から離れなかった。

僕の意見は無責任だ。

そうだ、現実の世智辛さを思え。僕のような考えは暢気だ。現実の細かさ、煩わしさ、どうしようもなさ。それらを思い、もう嫌だという気持ちで全身から、濛々たる火山の灰黒煙のように噴き上がった。

唐突に、お釈迦様のことが思い泛ぶ。仏様のことだ。人の心と言うか、
18 惟

と言うべきか、それはとても不思議だ。由来も根拠も理由もかたちもわからないまま、どこからかやって来て、僕を捕らえ、僕の胸中に勝手に心情を醸す。何だかわからないものに占拠される不安。不安だから、それをつかもうとする。でも、捉えられない。

僕の脳裏に泛んだのは、釈迦牟尼という哲学者の到達した哲学の、尋常ではない力であった。

古代インドでは、釈迦が来ると、大人たちは危惧して言っただけらしい。

「釈迦が来る。息子たちを隠せ。釈迦が若者たちを連れ去ってしまう」と。

釈迦の存在が醸す眼に見えぬ何かが若者を韜晦した。釈迦が誘わずとも、若い人たちは釈迦の立ち振る舞い、言葉の調べに惹かれ、誘われてしまう。近づいてしまう。その何かを敏感に感じ取ってしまう。

そして、その甚深なる考察がもたらす真理と真実とに感銘し、感化され、出家してしまうのだ。

何かを求め、魂が満たされず、世の損得の実感が未だない、純粹な若者¹⁹か

らか。

僕はもう純粹ではない。

充たされぬ想いがあるだけだ。だが、何の解決案もなかった。あり得るとすら思えなかった。

虚しく会社に戻る。集中して仕事をしたが、どこことなく、心はここに在らずの状態であった。

パソコンをシャットダウンする。鞆を持った。八つ折りにした新聞が今朝、差し込んだままに鞆のポケットに在る。会社の古新聞用ボックスに入れた。室を出て、エレベーターに乗る。エントランスを抜けた。自動ドアが開く。外気が頬に熱い。

アスファルトは蒸していた。黄昏の斜光がきつい。眩かった。ポケットから出す。白い木綿で汗をぬぐった。濃く滲みる。早めに仕事を切り上げたとは言え、こんなにも明るいことに驚いた。

「日が長くなっただな」

独り言する。思えば、盛夏よりも今ぐらいの方が日は長いはずであった。何の不思議もない。

寂びれた街の商店街を歩いていた。どういふふうに営業が成り立っているのか、僕にはよくわからない小さなお店たちを細かく観察するのが好きだ。ちよつとした隅つこの花壇の枯れた植木、土埃で固まった電気の配線の雑な留め方など、そういうのをもう何年も飽かずに歩きながら眺めていた。

昭和を僕は知らないが、昭和の匂いが懐かしい。

そんなふうに歩みつつ、町中に唐突にある町民の菩提寺の、その前をいつものように通り過ぎようとした時、飛び石が打ち水で濡れているが眼に留まった。低い青竹の籬、椿の濃緑の葉などの雫が黄金を帯びた茜色にきらりとする。くつきりと鮮やかな色彩は生々しかった。

昼の空は青く、夕の空は赤い。

色彩は存在せず、在るのは太陽から発せられる電磁波の一種だ。波長の長いものや短いものがある。

波長の短いものは網膜で感受すると、脳内で青として構築される。長いものは赤となる。波長の短いものは早く拡散するので、上空で拡散し、それが網膜に届いて、空を青く見せる。夕方は斜めから光が差すので、距離が長いため、波長の短いものは拡散しても届かず、波長の長いものが空中に拡散して網膜まで届く。

それが脳内で赤という現象に構築される。

色彩は実在ではない。波長の解釈である。効果である。『赤い色』という心的現象であり、『青い色』という心的現象である。

そう考えると、また様々に連想が起こって、想いが繋がっていく。

『そうだ、きつと、人の感じること、思惟すること、意識にあるもの・ことすべて、基本的に皆、同じ構造なのかもしれないな。』

言葉も概念も思考も愛も、同じようなものなのだろう』

そう思いながらも、対旋律のように、世俗的で、常識的な、別の考えを頭の隅でしていた。それは主として、こういうことだ。

『だが、それがどうした。人生の苦しみは切実だ。もし僕が不幸になれば、それを痛切に感じるだろう。もしも家族に悲しみがあれば、それは真実よりも現実的だ。たとえ、それが科学的な事実でなくとも。』

「実存は本質に先行する」という言葉はこんなふうにも解釈できるのでないか（こういう解釈ではないのだろうけれども）』

僕は何となく、寺の境内に入った。静かだ。香炉からわずかに煙が出ていた。か細く、頼りなく、幽かに昇り、すぐに消える。

僕は何を探しているのか。

何かを探しているのだろうか、推測していた。

昼間、釈迦のことを考えたからか。そんな単純じゃないだろう、などと心でせせら笑いつつも、わからないことだらけであった。それだけしかない。いくら考えても、何だかの結論に収まらない。成果を遂げられない。いつも、いつでも、未だ遂げず、収まらぬまま。

まあ、一々行動に意味がある訳ないか。うん、そうだな。それが現実だ。

と独り言しつつも、この独白は演技じみてる、演技だ、と二重奏的に思考している自分がいた。上っ面、表層的だ。安っぽい素人芝居、舞台は日常、いたい、誰に対する演技か。自分に？　むろんさ、観客は自分だけ。揶揄する自分と揶揄される自分があって、辣韭の皮剥きみたいにとこまでいっても本物に辿り着かない、永久に他人事で、かつ永遠に他人行儀だ、未来永劫に間接的だ。

この違和の感じは理屈から考えれば無理からぬことだ。まあ、理屈という存在者がどれだけ信頼のおけるものかわからないが。

観照される者は常に対象者だ。眼は眼を見ないはずだからである。本当に自分なら、ぴったり沿ってくつついて、それそのものであるはずだから。真の主体であり、見る側であって、自分自体であり、決して見られている対象ではない。

意識の対象は常に他者だ。直截の自分自体ではない。何事も改めて意識すると、緊張が生じるように、意識は違和感の別称であり、異芽と乖離の始ま²⁴で

ある。

気がつくと、いつものように駅に向かって、普通に歩いていた。

ありふれた日常だ。境内に入ったことは何の意味もなく、暗喩でもなく、契機でもなかつた。

私鉄赤門戸線のくすんだ小さな駅の自動改札機を通る。線路が高架ではないから、階段を数段上るだけで、すぐにプラットホームだった。

鏡と広告版を横目で見る。売店で新聞を買った。広げて読みながら、「神社仏閣って、落ち着くよなあ」

なぜか、今頃、そんなことを考えていた。どうして髭髯とするのであろう。わからなかった。わからなくとも、六編成の車輛が来る。来て、眼の前で止まった。乗る。座席はいつもと同じく空いていた。坐る。新聞を畳んで鞆のポケットに刺した。スマートホンを見る。

時々、異世界にいるような気分になることがあった。世界が妙にくっきりとして、違和感しかない感じになるのだ。スマホの画面には、地震速報があつた。
25

十七時五十分に？ 何も感じなかったのは、震源が遠い場所だからであろう。スマートフォンの警報も鳴らなかった。鳴る場合と、鳴らない場合とがあるが、違いがわからない。かなり以前から調べようと思っていながら、なかなかその気にならなくて、未だに調べていなかった。

JRに乗り換える乗換駅で発着時刻を確認した。元々、発着の時刻を憶えない方だが、この時間に乗ることが減多にないので、普段以上にまったくわからなかった。電光掲示板を見れば、二十分以上も間がある。ベンチは大学生らしき若者たちが坐っていて空いていなかった。

やっていられない気分だ。『生命の泉』が片隅に描かれるあのタペストリーが競売に出されたとしても、買うことはないだろうな。などと無意識に反芻している。

なぎくさ

難久簀駅でいよいよ本格的なローカル線に乗り換える、まずは、駅から出て

喫茶店で時間を潰すか、蕎麦屋で箸一枚にお銚子二本だ。日本蕎麦と清酒では親爺臭いと思う向きもあるかもしれないが、江戸や明治の風情みたいなものを（何の考証もなく、勝手に設定しているだけだが）空想して楽しんでいるのであった。まあ、ともかくも、この路線ときたら（地元愛の精神で大好きではあるが）、通勤通学時でも一時間に一本しかない。昼間など、二、三時間に一本であった。

帰宅に要する時間は毎日二時間。移動距離が二十キロメートルを超える程度でしかないことを考えると、時間がかかり過ぎているであろう。

だいたい、眞神郡の人間は郡から出ない。だから、余計、電車も少ない。ド田舎で、特に産業もないのに、地元を出なくとも、仕事があるのだ。もしくはしなくとも生活できる人間が多いのだ。

コーヒーを飲むにしろ、蕎麦を肴に呑むにしろ、本を読む。以前は何冊も持って、気の向いたものを読む、歩くライブラリー状態だったが、最近は一冊トホンで読むので、楽に簡単に何十冊も持ち歩ける。

むろん、中高生の中からそうやっていた同級生が何十人もいたが、気の利かない方なので、その利を知らながらも十数年も放置し、漸く数年前から始めた次第。

さて、いつもの喫茶店クラシコに足は向かっていたのだが、ふと後輩がやっている書肆に行ってみようという気になる。最新のカタログが刷り上がったと聞いたような気がしたからだ。二、三日前だ。買う気はなかった。美術書図鑑なみに、色校正にも拘って、とても高価だからだ。確かに稀覯本は美術工芸の類と言えた。

天平普蕭は二コ下だ。家は資産家で、その雑居ビルも買い取っていた。地下がライブハウスで、彼が高校生の頃、演奏したことがある思い出の場所でもあるらしい。好きな書籍に囲まれた書肆をしながら、そこも運営していた。生まれる家は選べない。親父がよく言っていた。同じ天平姓だが、近い親戚ではない。自由意志はない方が幸せだったかもしれない。雨に破れたポスターがオブ

のように斑に壁を飾っていて、よく言えば佐伯画伯のフランスの壁だ。絵の方は、剥がれかかつてはいないが。剥がれかかった上に重ねて貼って、それが剥がれかかっているから、余計に斑に見えた。

普簫がいる。店舗の奥でヴァイオリンを磨いていた。傍らの小卓に、クリスタルのオールド・ファッシュヨングラスがあり、琥珀の液体がワン・フィンガー入っている。

「あゝ、豊くん。久しぶりですね。

フィレンツェで古書を渉猟していた時に眼に留まりましてね、購入したんです。知り合いのエージェントに頼んで、今日、空輸で着きました。

かなり良い音です。高価でしたがね」

そう言って弾く。『ツイゴイネルワイゼン』だった。艶が奥深い、とても質のよいクラシカルな音だ。二十五歳以来、禁煙していたが、キューバ産の葉巻が吸いたくなった。カストロの写真が見えたせいもある。人間の感性は相通じるのか、普簫は抽斗から櫃を出した。開くと、一本二千元以上はしそうな葉巻

がならんでいる。

「やりますか」

「いや、もう二年も禁煙している」

「僕が吸っても大丈夫ですか」

「全然大丈夫だ。人の煙は旨いものだ。是非、頼むよ」

「おかしな禁煙ですね」

「禁煙に変わりはないし、旨いことも事実だ」

「でも、旨いとは感じるんですね。感じるけど、自分で吸いたいとは思わない、と。本当に吸いたくならないんですか」

「あゝ、不思議とね。旨いと感覚するけれども、自分で吸う気にはならない。

或る種の吝嗇だな、努力を無駄にするのが惜しいんだ」

「それ、物惜しみですかね。ふふ、じゃ、ターキーの十二年物がありますが」

「それはもらおう。三年前の誕生日に八年物をもらって以来のターキーだな」
バーボン自体が久しぶりだった。普簫と会うのと、どちらが久しいかわわ
30ら

ないくらいだ。

普簫はイタリア製のデキャンターのクリスタルの栓を抜いた。とくとくと注ぐ、いかにも旨そうだった。

葉巻の胴体を専用喫煙具の火で炙って、ウォームアップする。口をカッターで切って啜えた。旨そうに吸う。どちらかと言えば、水煙管が似合っていた。たぶん、見掛けのせいだろうと思う。

長めのボブにも見えるマッシュルーム・カットに、ペイズリー柄で派手な色合いのジャケット、花柄のサテン・シャツ、インドっぽい柄の太いネクタイ、モロッコ革の靴、サイケデリックだった。

バーボンを呑んで、何となくチャーリー・パーカーが思い浮かぶ。パーカーと、デイジー・ガレスピー。音がくつきり聴こえる。葉巻の煙とバーボンのフレバーとサウンドが絡んでとても美しいハルモニアであった。感覚と記憶は不即不離で、とても深い。そして、良いものは、ジャンルを問わず、芸術も嗜好品も皆、繋がっていた。

滋味深い皮革装丁の古書のカタログのカラー写真を眺めながら、重層的に陶酔する。味覚が刺激された。

時間になったので、行こうとすると、

「僕も今日は店じまいにします。カタログは進呈しますよ」

という訳で、仲良く敵邨村まで帰ることになった。眞神鉄道車輛のボックス席に坐りながら、缶入り麦酒を呑み、レアな初版本や活字の話など、つらつらするうちに、僕はぼっと聞いた。

「壁にゲバラやカストロの写真があったね」

「あゝ、何で飾ったか、もう忘れちゃいましたけど、カストロは『革命はロマンだ』と言いました。その言葉、好きですね」

「ロマンか。凄いな。でも、実際、数十人でバチスタ政権を斃したものだ。うーん、世の中って何だろう。それもこれも、時節ってことなのかな」

「革命もまた人の営みですから。理では割り切れない部分もあるでしょうね。革命、革命、ロマン、あゝ、フランス革命の虐殺、暴力、そういう視点もあります。レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの著作がすべて真実であるとすれば、それはとても恐ろしいものです」

『『パリの夜』、思い出したよ』

「どんなことも多様多義、多面的、遷移し、複雑系的に絡み、境目のない、三次元的立体モザイクです。全体を一度に見渡すことは誰にもできません。

バチカンのシステイーナ礼拝堂で『ミゼレーレ』を耳で憶えて譜面に起こしたモーツアルト的な超絶の天才性が必要です」

「四声と五声の合わさった複雑な二重合唱だ」

「なみの人間は断片しか捉えられない。

で、どこを切り取るか、視点はさまざま、フランス革命もロシア革命も女性の「パンを超越せ」というデモから始まったというものも興味深い」

「太古、女性は大陽だった……か」

そんな連想から、『生命の泉』の話をする、普蕭は、
「蓼くん、タペストリーに呼ばれたんですね。そう思いますよ。すべては繋がっていますから」

僕は訝しげに、普蕭を見遣る。そりゃあ、そうだろう。

「繋がっているって？　どういう意味だ」

普蕭は一息置き、

「予言って、あり得ると思いますか」

「思わない。未だ起こっていないことがどうしてわかるんだ。実は未来も既に起こっているのか」

「なぜ、予知夢を見るのでしょうか」

「そんなものを見たような気分が構成されているだけさ。そもそも、はつきりしないじゃないか、夢って」

「そうとも限りませんが」

「まあ、いいや。続きを言ってみろよ」

「すべてが実は時間も空間も超越した存在なのかもしれません。」

すべては既に起こっていて、すべて未だ起こっていないのかもしれない。今
っているものは、そういうことなのかもしれません。もしくは、このような理
窟にもまったく囚われない超越的な存在かもしれません。

だとすれば、予知もあり得ます」

「それも理窟だな」

「つまり、脳はすべてを知っているのです。百四十億の脳細胞が一、二パーセ
ントしか使われていないのも、いや、使われていないように見えるのも、そう
いうことかもしれません。実は、すべての情報を収納するアーカイブとして、
百四十億の脳細胞で作る百四十兆通りの回路が必要なのかもしれません」

「そう考えると、足りそうもないけどね」

「そうですね、飽くまでも、たとえば、ですよ」

「そうだとすると、なぜ、物事は時系列で、空間的に整理されて見えるんだ」

「脳が（いや、脳じゃなくてもよいです。そこまで行くと、もう脳がって
35う

話ではないと思いますので）それを時空で整理している。

時系列でならべて、空間的に配分している、からでしょうかね。さ、行きましょう」

畝邨駅に着いていた。

午後六時を過ぎると、駅員もいない。自動改札も止まる。どうするかと言えば、どうもしない。皆フリーパスだった。僕らは改札が出る。

バス停にはバスが待っていた。

「出発は三十分後です。屋台のコーヒーでも飲みましょう」

繁った岡と田んぼしかない場所に茶の屋台がある。どことなく、ファンタジーじみていた。

デコレーションされた移動店舗（引き摺るほど毛の長い牛に牽かせているのを見たことがある）のマスターは太いストライプのシャツに蝶ネクタイ、サスペンダーでズボンを吊り上げていて、似ても似つかないが、懐中時計を持ったウサギを聯想させる。

自家焙煎のコーヒーを立飲みしつつ、額入りの『白鯨』の古いイラストを眺めた。

確かに鬱蒼とした杜から和式のエルフが出て来てもおかしくない。

或る日、予感が。

目が覚めてから見たその夢は、幻影と言うべきか、瀝青のように映像がこびりついて離れない。

中学生の時に、小遣いを貯めて買ったサバイバル・ナイフを持った。人を傷つけるために購入した訳ではない。古いアクション映画を見てから、どうしても欲しくなった物であった。何で待つのかわからない。でも、夢のとおりなら、必要かもしれない。でも、どんな夢であったか、定かには覚えていない。感触だけがあった。

「半日、年次休暇をください」

僕は会社に電話をする。自分の車を出した。

街に出て、有料駐車場に停めた。齋鐵工務店に向かう。仕事じゃないのに工務店の駐車場を使う気がしない、と言うよりは、閉鎖した工務店の前に停めるのは、怪しまれる気がしたからであつた。

歩いて向かう。緊張に体が強張つた。動悸が激しく昂る。何が待っているかわからないのに、何が待っているのかわかつていた。

建物が見える。明らかに手が震えて、止められなかった。

二階の事務所に向かうガラスの外扉は、一昨日見た時はテープが張られていたが、今はない。

破れてテープはぶら下がっていた。

ドアを開けて、閉める。その音に反応するかのようには、ガタツ、という音がした。

「やばいっ」

僕は階段を駆け上がっている。

「社長っ！」

事務室を抜けて、社長室に飛び込む。扉は開いていた。四秒とはかかっていない。

「あゝ」

首を吊っていた。黒い木製両袖机の前だ。

どす黒いような赤と言うか、土気を帯びたような赭い顔、眼がぎよろと、まだ生きていて、こっちを見ている。

その眼は助けてくれと訴えていると、僕には、はつきりわかった。

意識も明瞭、まだ生きている。床から離れた足の先に、背凭れのない小さな丸椅子が転がっていた。さっきの物音は、これだ。

助けなければと思いながら、怖くて動けなかった、一瞬。しかし、迷いを振り解いたのは、どこからの意志だったのか……

「今、すぐっ。今、すぐに」

何か言い訳のように、そう言った。言い訳？　そうだ、照れ隠しのよう

怖さを真に受けないで、覆い隠すような、照れ隠しの言い訳だ。

僕は社長が首を吊っている鉄管の器具に飛びつく。移動式の鉄棒のようなそれは人体とともに倒れた。いったい、こんなものをどこから持っていたのか。と言う以前に、あれは本来、何に使うものだったのか。今でもわからない。そんなことには気がついてさえなかった。

「んぐっ！」

倒れた人体から、声にならない呻きが漏れる。

まだだ、白い太い綱で、首が絞まっていた。サバイバル・ナイフで、慎重に「焦るな、気をつけて、繊細に」と心中で絶叫しながら冷静に、外科医のように精密に裂く。

「ゼハっ、ゼハっ、ゼエ、ゼエ、ヴォホン、ヴォっ！」

激しく咳き込むが、苦し気ながらも、気道は確保されているようだった。大丈夫、助かる、早くっ、早く、早く、早くと気持ち之急いて、指が震え、スマートホンのダイヤルが押せない。

白い綱は柔らかく、社長の喉も強く抵抗したようで、思いの外（飽くまでも比較の問題だが）、喉を塞ぎ潰していなかった。いや、その時、そう思えたというだけで、確認はしていない、実際はわからない。

救急車が来るまでの間、声にならない、かすれた声で、途切れ途切れしながらも、齋藤社長は語った。眼はあらぬ方を、ただの虚空を凝視し、恐怖で見開かれている。その主旨は次のような言葉だった、と思う。

「すまない。ありがとう。情けない話だが、死を覚悟していたつもりだったが、死に堕ちる瞬間、突然、逃げ出したくなった、助かりたくなったんだ。

いや、体中の細胞が物凄い勢いで叫び、いや、絶叫するのが聞こえたんだ、『やめろ、やめてくれ』『死ぬな』『殺さないで』『生きたい』『お願い、死にたくない』『生かしてくれ、生きていたいんだ』『まだ生きたいよ、殺さないで』って。

全細胞が大怒号大慟哭して、彼らの喉を引き裂く狂叫が、ぐわんぐわんと空間を占拠して、何千億、いや、何兆もの声で、全宇宙を破壊するほど轟く⁴⁹を

聞いたんだ」

そして、声のない嗚咽を漏らした。

その叫びが生命の泉か。何となく、そう想った。

「そういう訳でもないと思いますよ」

その件を話すと、普蕭は冷やややかに言った。そう言われれば、そうだが、そう言うてしまえば、つまらない。

中秋の名月だった。皓々と耀く満月である。ウサギが餅を搗くと言うよりは、異世界への入り口に見えた。どっちが異世界なのか。どっちもだ。莊周胡蝶の夢か。

「僕もわからんさ。ただ、そう感じた、という事実を言っただけさ」

「なるほど。それならわかります。僕もそんな連想をしました。してしまった事実は否定できない」

ワイルド・ターキーの十二年が呑めるとわかって以来、僕はちよくちよく通う癖がついていた。

「その後、会社は休んだんですか」

そういう言葉で、体を気遣ってくれているのがわかった。

「あゝ、そうだね。あの後に仕事はできないよ。翌日も無理だった。ちよつと、さすがにね。」

本当は木曜も金曜も休みたかったけれども、仕事もあるし、会社の上司の雰囲気にもね、身内の不幸という訳でもないの。どこもそうだろうけど、暗黙の空気感が厳然とあってね。頑張って仕事に行っただけ。

自分の感覚では、かなりな無理強ひだった。軟弱なだけかもしれないが、かなりきつかったな。肉体的にもね。

この社会はそういうところ、過酷だよな。人間の人間的な部分を認める優しい価値観がないように思う」

「休んでもよかったのに、って僕は無責任に思っちゃいますけど。重労働し

たから。瞬間的に、出せる体力のすべてを出し切ったと思います。不適切に聞こえるかもしれませんが、命のために、死力を尽くしたと言えます」「そこまでするつもりはなかったんだけどね。不思議だ、今にすればね。夢うつつだったような気もする」

「でも、怖い話だ」

「おや、そんなことを言うなんて、珍しいね」

彼は暗鬱な表情になって、

「だって、考えてもみてください。まだ後戻りの余地があったからよかったですが、高いところから飛び降りて、その時に細胞の絶叫を聞いても、もう、どうしたって戻れないんですよ」

僕もゾツとした。

「それって、落ちる途中で、『あゝ、こんなことするんじゃないか』と気がついて、後悔するってことか」

どれほどの絶望か、どれほどの恐怖か。考えたくなかった。

「細胞の叫び声の話、今まで聞いたことがなかったので、齋藤社長さんの身上にだけ起こったことかもしれないけどね」

「それすらも、確かめようがない現実には僕らは生きているのか」

日本の街中にカボチャのデコレーションがならんでも、我らが郷は平穩に肅々と師走の準備を始める。

反物を選んで帯や着物を注文する、又は仕立て直すとか、極太の注連縄を編むために藁を選んで祓い清め始める、神前に捧ぐ御神酒を満たす酒樽の木材を選んで祓い清め始める、などなどであった。

のどかなそれらをしみじみ眺め、懐かしい気持ちになっている。

僕は仕事を辞めていた。

社長の自殺未遂の件が大きな契機であったが、それだけではない。ずっと前からあったものだ。一々それを思い出し、考えるのはもう面倒臭かった。今は

流れに身を任せ、何も考えるべきではない時期だとぼんやりと思っている。

実家から通っていたので、経済的にすぐに困ることもなかった。求職はしなかったのも、失業給付金はもらわない。失業給付は求職者に対する制度なので、もらえないと言う方が正しい言い方だが、もらえないと言うと、日本語の語感として、もらおうとしてももらえなかった、又は、もらいたかったがもらえなかった（同じか……）という雰囲気醸されるので、僕としては不本意なため、もらわないことが正しいと思うから失業給付の手続きをしなかったという意味で、そう言いたかった。

と、一々脳裡で反芻することが、面倒臭い奴だと言うか、言い訳がましいと言うか、自己執著的で、くだらない見栄だ。という自己批判もナルシシズムであった。さて。

ルーチンな独白を終え、僕は今日も薙久簗町に向かう。

普簫の書肆でアルバイトを始めていた。在庫の出納管理やカタログ用写真の撮影、カタログとは別に目録も作っていたが、その管理や売込みなどを専任

う。

売込みは今までやっていなかった（何という殿様商売か）ので、僕が初めてやり出したと言つてよい。古本の他に出版もしていた。主に無名の作家の小作品を編んで、アンソロジー的に出版している。趣味に近い仕事だった。

そんなアンソロジーを持ち込んでも、普通の書店では、
「うちではこういうのは、どうも。申し訳ありませんが」

申し訳なくはないと思う。当然だった。

金のために働いている。

売れない書物を眺めて、こいつらは僕だと思った。

このアルバイトを始めたのは、お年玉の資金を稼がないといけないと思い始めたからだ。貯金を崩せばできたが、何となく働いた金で賄いたかった。貯金も働いた金の集積に違いはないと思うが、漠然と、そう脅迫されていた。こういう定言的命令って、どこから来る、何なのであろうか。

それまで本当にぼんやりしてばかりで、何もしていなかった。枯れ果て44秋

を眺めていただけだったのである。

脱穀が終わって積まれた藁が乾き、遠い青い山の頂が白くなり始め、透明な
明るい空気の中の黄葉や紅葉などが寂としながらも、鮮やかになるのを、飽か
ずに見ていた。

又は、ふと行った天平碧巖寺の露地の蹲踞の水に泛び、微動もせぬ朽ち葉一
枚をも飽かずに。

小遣い稼ぎに、農家の手伝い（この時期は、ほとんど仕事がなかったが）で、
雪に備えて納屋を補修したり、真菰を粗く編んで筵を作って薦巻きの準備を
したり、……などであった。そんな時、突然にだ。

ふと、口の中にターキーの芳しさが広がった。

また科白が口を衝いた。

「後輩に雇われるのは気が進まないが、頼んでみるか」

「うちじゃ、これ以上、契約を増やす予定はないので」

委託販売契約なんて、別に増えても支障はないと思うが、何を言おうが人の勝手なので、僕は黙っていた。

週刊誌や雑誌が入り口の近くに入店してすぐに目につくように山積みになっている。今一番売れている本の手書きランキングもPOP広告のように掲示されていた。トップはタレント本だ。仕事に貴賤はないし、ひとかどの成功をした人の話は一聴に値するし、又、選挙と同じで人気者が勝つのが世の鉄の掟であった。

むろん、そればかりではない。

政治家の場合は血筋と言うのもあるが。見渡せば、二世、三世議員が何と多いことか。結局、そういう世の中なのだ。政治家は一血統に一人とか、規制できないのか。できないよな。どう考えても暴論だった。

女性雑誌の表紙がたまたま二世だったので、そんな連想が働く。

書店を出た。遅い昼飯でもと思い、コンビニに入る。

書架にあの女性誌があった。何となくめくる。きれいな写真が眼に留まったインタビュー記事。

有名俳優の次男だった。十代でファッション・ブランドの広告塔になって、ファッショ誌に取り上げられている。彼の父は一流企業のオーナーや広告業界の大物と繋がっていた。

英語やドイツ語、フランス語やイタリア語を流暢に話し、ベルリンでヴァイオリンを学び、四年に一度のチャイコフスキー国際コンクールで二次予選を通過（予選は三次まで）、容姿端麗で、かねてより話題の存在であった。

世界の評価は真の価値、本質に拠るものではない。さまざまなコネ、戦術、縁故、密談、損得勘定、忖度、根回し、駆け引き、賄賂、口利き、人と人とのパワーウオーズだ。

そういうものが縁り結ばれた空疎なものでしかなかった。何かが焦燥する。『山月記』の虎になった気分であった。

だが、想いを焦がして何とする気か。

商品価値は人が求めることに因って、刹那的に縁り結ばれる現象でしかない。だが、価値は価値であった。苦痛と同じだ。五蘊は皆空だからと言って、痛くも苦しくもないと言える人間はいない。

仏陀がいみじくも言ったように、実体のないものが我々を打ち破り、その怒涛に飲み込むのである。妄想も頑迷で解けないものならば、それはもう真実と同じだった。現実である。またもやルーチンにそう思うと、疲れた。

って愚痴言っても、何の足しにもならん。行きますか。
木枯らしに襟を立て、書肆に帰る。

「豊くん、お疲れ様です」

僕はドカツと坐った。

「いや、全然だめだね。この書籍らが愛おしくなってきたよ」

「それは幸せなことです」

穏やかな無表情で普蕭が言う。僕は眉を顰めた。

「そうかな」

「時勢に無関心なこいつらを見てみると、何だか癒されませんか」

葉巻を出し、バーボンの入ったデキャンターの栓をひねる。

「そう言えば、力が抜けるな、確かに。まあ、しょうがねえな、みたいな感じ
で」

「強張りが緩んで少しホツとするなら、それが幸せでしょう」

「まあ、そうかもな。答はないからな。幸せは幸せと感ずることではないか
ら」

五蘊皆空でも幸せなら、それが実体だ。皆、そう想って生きている。

だから、親は子の幸せを願う。五蘊は皆空だから願わないと言うのは、釈迦
牟尼くらいだろう。と、その真の弟子たちくらいか。

ラーフラ（羅睺羅）を出家させたのは親の愛ではなく、仏陀の慈悲であろう。
って真剣に考えてどうするか。ちなみに、釈迦族のシッダールタが出家し

年後に生まれたという説もあるようだが、本当に実子か。などと、どうして頭は勝手に回転してしまうのだろう。

思念は唐突にやって来るが、考概は本当に意味としての本質を持っているだろうか。いや、ないだろうな。

生物学的なもの、生理現象で、脳神経細胞の膜のうちに流れ込むイオンのせいで、膜内と膜外とで電荷の正と負との関係が入れ替わり、逆転すること起こる電氣的な発火という、化学的な現象だ。

ある訳がない。

またまた、ちなみにだが、ラーフとはナーガ（龍）の頭という意味らしい。だとすれば、釈迦族のトーテムはナーガ（龍）だというのを読んだことがあるが（つまり、釈迦族の頭になる人ということだ）、自らを太陽の末裔（日族）と称したという説も読んだような気がするので、併せて考えると、龍と太陽は同じということなのか。

龍ではなく、蛇ならば、脱皮を繰り返す蛇は沈んでまた昇る太陽と重なり、

死と再生の象徴という説を聞いたことがあるが。

とてもかくても候（どうあっても宜しゅうございます）。

鎌倉末期から南北朝時代に成立したという『一言芳談抄』の一文が突然、頭に浮かぶ人は僕だけではないが、「生死無常の有様を思ふに、此世のこととはとてもかくても候」というのが湧いて来たのは、やはり、釈迦牟尼のことなど考えていたからだろうか。仏教繋がりが。

キューバの葉巻の匂いを嗅ぎながら、ターキー片手に普簫と談笑しているうちにそんな話にもなった。

ジャケットの印刷の匂いを愉しみ、LPレコードをターンテーブルに乗せ、古いジャズを流す。何となく、クリスマスっぽい感じがした。

「実は、欧州で古い印刷機をネットで見つけて」

「古い？ どのくらいの時代の」

「たぶん、十九世紀末、ドイツ製です」

「グーテンベルクとか」

「そこまで、古くありませんよ」

「ドイツのどこ」

「どこで造られたかまでは、わかりません。資料がないから。今、保管されている場所は、ブレーメンです。ケーニッヒ・バウワー社製という以外、何もわからない」

「まさか、買うつもりか。本物だとしても、使い方がわかるのか」

古い車をレストアしたり、わざわざレミントン・ランド社製の、ジョルジュ・シムノンやペリー・メイスンが使いそうな、古いタイプライターを使ったりする男だ。必要な消耗品もどこから蒐集していた。

「ネットで写真を見ただけで、しかも、詳細が記載されていないので、よくわかりませんが、買いました」

「え、いくら」

「船便ですが、輸送費込みで、五百万くらい」

「おい、おい」

僕は蒼褪めていたかもしれない、戯れにもほどがある、戯れにも……

「自分へのプレゼントですかね。そういう余興もないと。

ちなみに、活字もついていますが、当然、日本語の活字はないので、東京の町工場に、特注品として依頼してあります。鉛の活字を鑄造するんです。それで本を作ります」

それに何の意味があるのか………と言うつもりはなかった、はずだったが、「それに何の意味があるのか」

って言うってしまうも、普蕭にとって、辛辣な皮肉や批判など、胡椒か、ナツメグの類に過ぎない。

莞爾と普蕭は笑った。

「ありませんよ、わかっているじゃないですか、薨くん」

「身も蓋もないな」

「そもそも、意味が意味じゃないから、意味が在っても仕方がないし。それこそ、とてもかくても候」ですな

「結局、そこか。もう、金剛般若経のような繰り返しはやめようぜ」

その聖典には「須菩提よ、△△は○○や否や」「否です、世尊は△△は○○に非ずと説かれました。それゆえ、○○と名づけられるのです」という構えの繰り返が多い。

仏典の祖型は仏陀の死後に、口頭で確認され、口承で伝えられ、皆が暗唱するものである。形式としては避け難いことであった。

「古代インドにおいて、一切が色・受・想・行・識の五蘊に依拠して構築される、と言い切った見解は、まさに現代科学を先取りした予兆的な卓見とも言えるでしょうね。

確かに現代の考えとも矛盾しない。

我々にとって、直截的には、すべての存在（存在者）は、畢竟、人の感覚上に浮かび上がるものが縁り結ばれて構築された現象です。

色とは感覚の起因となるX（感覚が起こるにはその起因が必要なはずですから）、受は色によって起こる感覚、想は感覚によって起こる表象、行は表象を構成して色彩や形などとする作用（諸行無常の『行』）、識はそれを特性として異他与識別する作用（たとえば、色彩ならば赤や青などなど、かたちならば丸や四角などなど、他何でもそうです、犬猫、蒼穹、雲、海、風、砂漠、街、椅子、コップ、時間、空間などなど）、これら五蘊の機^{はた}らきによって、現象が縁り結ばれる。

これが我々にとっての、直截的な存在（存在者）です。

現代ふうによえば、一切はニューロン（神経細胞）による化学的な現象、ということになりましょう。

心、論理、執著、意識、認知、感覚、思考、悲哀、納得、理解、解釈、肯定、すべてがニューロン上の化学的現象です。

それ以上でも、それ以下でもないという歴然たる科学的な事実、現代の常識の範疇の中では、まったく否定のしようありません。

誰にとつても、明晰判明な事実です。

新しい「良識」（又は新しい「迷信」か）が出ない限りは」

「思惟も感情も、心、意識は物的な現象か」

「そうです。現代の知識の限界内で言えば、そう考えることが当たり前ですね。人口に膾炙した科白を敢えて言わせてもらえば、すべてインパルスの刺激が醸す諸器官の現象です。物的な現象です。

いかなる本質を求められましょうか」

「まあ、それが人口に膾炙しているかどうかは知らないが、確かに、否めない事実ではあるね」

と言いながらも、僕は口調に否定的なふうを帯びさせていた。

普簫はそれを面白がりながら、退屈そうに微笑し、うなづく。

「そうですね。知性も情も、脳神経細胞と密接な関係があります。とすれば、知性も情も、紛れもなく、化学的な現象です。その一端を見ても、晰かですね。たとえば、脳神経細胞に起こる化学的な現象です。

細胞は細胞膜に蔽われています。

脳神経細胞の膜の内側は、膜の外の組織液に比べると、カリウム・イオンが多い。膜の外と比較すれば、マイナスに帯電しています。細胞膜の外はナトリウム・イオンが多い状態です。そのイオン濃度の偏向がうちと外との電位差を做し、電位差は概ねマイナスの七十ミリボルトくらいです。

これが細胞の静止状態で、静止電位の状態にあります。

膜が分極している状態です。

ちなみに、一つ一つの脳神経細胞の役割は、他の脳神経細胞から入力された情報を他の脳神経細胞へ出力することです。情報伝達と情報処理とも言われます。

脳神経細胞は刺激を受けた（情報が入力された）時、活動電位を発生させます。ミリ秒単位の出来事で、すぐに静止電位に戻ります（この一刹那がインパルスと呼ばれるものです）。

インパルスこそが偉大なる思想の素粒子であり、崇高なる精神の素粒子で

あり、身を裂く怨念の素粒子であり、浅ましき劣情の素粒子です。

さて、電氣的発火をもう少し詳しく言うと、刺激が入力された時に、細胞膜にあるナトリウム・イオンのイオン・チャネル（イオンに細胞膜を透過させる蛋白質）が開口して流入し、本来は、カリウム・イオン濃度が高かった脳神経細胞内部のナトリウム・イオン濃度が上がります。

その流入とわずかな時差を置いて、カリウム・イオンの方は逆に細胞膜内から排出されていきます。

静止電位の状態にあった時の、内側と外側とのイオンの構成が逆転します。ミリ秒単位の出来事ではありますが、脳神経細胞のうちと外との電位差の關係が逆転するのです。

この逆転した刹那が活動電位の状態です。静止電位から活動電位への刹那の逆転が電氣的な発火、インパルスという訳です。

このインパルスが、次の脳神経細胞に於いてインパルスを起こす契機となるのですが、その仕組みを言う前に、脳神経細胞の構成を言います。

細胞体（細胞核がある中心）、樹状突起、軸索から成ると大雑把に言って、概ね間違ありません。

樹状突起は刺激を受け取る場所で、入力装置。軸索が出力装置です。

軸索にある軸索丘（軸索の起始部、軸索小丘とも）という部分で、先ほどのような要領で、インパルスが起けると、軸索がその軸索末端から神経伝達物質（グルタミン酸など）を次の細胞の樹状突起へと飛ばすのです。ちなみに、軸索末端と樹状突起の間隙（間隙が在るのです）を、シナプス間隙と言います。

さて、神経伝達物質が樹状突起の受容体に至ると、またもや細胞膜にあるナトリウム・イオンのイオン・チャネルが開口し、ナトリウム・イオンを透過させます。細胞の外にあったナトリウム・イオンが脳神経細胞内部に流入します。脱分極、軸索丘でインパルスが発生し、軸索末端のシナプス小胞が刺激され、神経伝達物質を分泌し、シナプス間隙を跳飛し、もう一つの、隣にいる別の脳神経細胞の樹状突起の受容体へ飛ばすのです。

この繰り返しですが、インパルスが脳神経細胞から脳神経細胞へと伝わっ

くかのように見える現象の実像です。

この化学的な現象が人間の大きいなる思考・希望・精神・怨念・劣情の実際の姿、事実、実在の像です。

インパルスが伝導し、運動や感情、思考などを起こす所定のネットワークを構築する時、運動や感情、思考などが起こるのです。これが精神や魂魄です。その実際の姿、事実、実在像です。

かくして、諸々の考概が、諸々の考概として象を具え、意識が生じます。今まさに動いている、今、現在として現実ここにいることを理解し、了解を構築し、僕らを納得という気分にかけている、この意識です。僕らにとって、
今”そのものであって、現在という名で、自分であるかのように観じている、この存在そのものです。

いや、もうこんな事実は、豊くんには釈迦の耳に念仏でしょうが。

まあ、とにかくにも、畢竟のところを言えば、大海原や薔薇や、父母の愛やご飯の美味しさや、たくさんの涙や感動や、正義・真実や風邪熱のたるさや、
63

足し算や幾何学や美や夢想なんて、そんなものです」

僕は嗤った。

エッセンティヴ

「だから、一切の考概が空疎だとか、（西洋哲学で言うところの）本質的ではないとか、ロゴス的なものは実在ではないとか、イデア論的な理解や考え方は無効とかを言う批判や、そういう類の一切のダメ出しなどは、その判断などもまた、ダメ出しされたもののうちの一部であることを省みなければならぬであろう。

それはそうであろう。一切の批判や判断等々という類のものは、論理的な思考の法則が導く経緯を辿るもの、論理という道程が示す航路に遵うものだから。

空疎だとか、実在ではないだとか、無効だなどと、散々揶揄した部材によって構築された構造物だから。

むろん、論理という法則に従う限りに於いては、という限定つきではあるがね。

そうさ、ますます混迷は深まるばかりだよ。

理解などというものは、納得という気分ではない。

情緒だ。

神経伝達物質に起因して醸される気分、情だ。

しかも、それら情、気分が醸成される経緯も、根拠も明解ではない。定かではない。

その上に、論理を構築する部材である諸考概は得体の知れない何かだから、否定すら不可能で、手も足も出ない、決まりがつかない、着地点が得られない、宙ぶらりんだ。

何も遂げられていない、いずれにも収まりのついていない、未遂不収の状態だ。我々はそのさなかに、平気で生きている」

普蕭も嗤っていた。そんなことはわかってますよという感じ。

「そのとおりですね。敢えて意識し、敢えて考えようとすれば、上下も前後も左右もない、どっちが左で、どっちが上で、どっちが前かもわからない、⁶⁵の

宙空で、ただ、足搔き藻搔くだけです。

つかもうと動いている動作の状態、未だつかめていない、足場がない、何も決まっていない、作業の途中、次へ動こうとしている中途の、そのさなか」

少し面倒臭くなりながらも、僕は、

「もっとも、『インパルス』思考・喜怒哀楽』説も “見える” 事実が “見える” ままであるとすれば、の話だがね。

科学者たちが実験で観察したもの、こと、経験等が、そのとおり、その見えのままであって、事実、真実、現実で、実態であるとすれば、だ。という意味だが」

「わかりますよ」

「僕らには感覚が起こって、認識があるように見える。直截に、そのものとして見えているから、そうとしか思えない。

その見えるままに、真実として、起こっていることが実在するならば、脳神経細胞が一切であるという説は正しい。

だが、残念ながら、それを確かめることは、とても難しいように思う。いつの時代も考えられなかったようなことが成し遂げられるのが歴史ではあるが、眼は眼を見ないからだ。自分の眼が自分の眼を観察できないからだ。『眼』では『眼』の正確さと精確さとを証明できない（論理的・経験的にはだがね）から。眼は眼を見られない。

しかしながら、すべての合理的な客観的実証主義・科学精神は『眼』に100%依拠している。他にやりようがない」

「眼が眼を見ないという事実・現実も、経験でしかありません。眼の経験です。『眼』が観察した結果ですよ。当てになりますか。『眼』ということが既に憶断ですよ」

「こんな話を誰が喜ぶのか。ふ、しかし、もはや、『キリのない話』の類だね」「だから、真の真を言えば、自分で決めるしかないんです。自燈明（自分自身を燈明とせよという仏陀の言葉）とは、よく言ったものです」

「その言葉にも難癖はいくらでもつけられるけど、大きな方向性としては67そ

れしかないんだろなとは思う」

僕の捏造的に投げ遣りな表情を、普簫が可笑しそうに眺めながら言う、
「何だか、つまらない話ですね。ふふ、誰もが眉を顰めるでしょうね、こんな議論聞かせたって。何ら生活にも、現実にも、学問にも必要とされないテーゼです。」

結局、何もわかっていないから」

「ふむ。僕は興味が尽きないがね」

「それは、なぜでしょうか」

「なぜだろう。窮極を究竟したい気持ちかな。でも、これも自己固定の一つの様式だね。繁文縟礼な美辞麗句で装っているけれども、人々は本能的に感じ取るから反感を覚えるのさ、僕が究竟を欣求するのは、畢竟、自分が特別でありたいという、一種の権力への意欲、歪んだ自己肯定欲、つまるところ、生存のための自己保存欲なんだ」

「でも、人間の行為なんて、すべてそれですよ。いや、生物、生命なら。」

いずれにせよ、僕らの会話が無意味過ぎるのは、わかり切ったことです。

空疎だ、非實在だ、無効だと言っても、痛いものは痛いし、辛いものは辛い。

病院のベッドでうんうん唸っている現実は消せません。なくせません。苦患を癒してもらえません。癒したいなら、医者所へ行つて、医術で治療するしかありませんから。

諸考概が無効だなんて言つたつて、今まさに苦しんでいる人の苦痛がなくなることはありません。

人は最低限、それを求めて生きていますからね、健やかな無事を」

「ごもつとも。僕らの議論は誰も喜ばぬ話だな」

快活な微笑。楽しいのだろう。僕もくすりと笑つた。

「僕自身も恋愛だの、現代を生きる人間の心の襞の微妙な陰影などには興味がない。好かれない人間だ。こいつらと同じさ」

僕はまた書籍らを慈しみ愛おしみ、骨董のように手に取つて玩味した。もし今、眼の前に志野焼の傑作、銘『卯ノ花牆』があつたとしても、これほど鑑賞

味しないであろう。

あゝ、もう十分だ、飽きたよ。生活に戻ろう、事象に戻ろう、もっともっと、人の飲む話をしようと決意したのは、節分の豆撒きも終わって、一週間以上が過ぎた頃であろうか、除雪された歩道を昼飯帰りに歩いていると、某画廊兼骨董屋の大きなガラス窓越しに見える店内の一角にあるものに眼が留まった。

「おい、普簫、あれ」

「あれって、何ですか？」

「いや、『生命の泉』が」

あのゴブラン織のタペストリーがあった。何という名称なのか知らない、名称があるかさえも。ただ、隅に『生命の泉』が描かれているから、僕には『生命の泉』だ。

普簫が冷静に言う、

「あゝ、あれがそうなんですネ」

見ているうちに、僕は暗澹たる気持ちになった。

「何てことか。値札が見えるが、十万円だ」と

一緒に覗いていた普簫が僕を振り返る。

「社長がいくらで購入したか、聞いているんですか」

そう言えば、聞いてはいないかな……僕は暫時、思案した。思い出せない。

「いや、はつきりとは。でも、数百万だろう、あの話っぷりでは」

思い込みかもしれない。

普簫は気の毒そうな顔をし、

「残念ですね。新品なら、数万円の商品価値はあったかもしれませんが、骨董としては、よくても数千円です」

眩暈のようなものを感じた。

「偽物なのか」

きっぱりと言う、

「偽と言うか、ジーンズをダメージ加工して売ると同じ感覚ですよ。風合いを醸すよう、アンティークっぽく加工しただけで、作った人に悪意はないと思います。」

齋藤社長に売った人が悪い人ですね。騙したんだと思いますよ」

僕は動揺していたが、それは社長のためではなく、自分の中にある大切なさまざまがいかにも淡く儚いものであるかに愕然としたことに愕然としたからであった。わかつているはずなのに愕然としてしまった。わかつているということの虚しさに、言い知れぬ不安を覚え、同時に、それでも未だ萍のように残る自尊の妄執が、これも生存欲に由来する自己肯定・自己保存の本能の亜種だが、この期に及んですらも羞恥などを覚えていることへの絶望からであった。

むろん、生活に帰ると決意したのだから、これでよいのだが。そう、よいのだ。典型的なハッピーエンド。